

2016 年、夏。「特養の壁崩壊」 ～福祉の視線を地域へ、地域の視線を福祉へ～

馬場 拓也さん（社会福祉法人愛川舜寿会 常務理事）

Profile

社会福祉法人愛川舜寿会（ミノワホーム） 常務理事 1976 年 神奈川県生まれ。

国際武道大学体育学部卒業後、ファッション業界に進み、某アパレルブランドを経てイタリアのファッションブランド「ジョルジオ アルマーニ ジャパン株式会社」入社。トップセールスマンとして活躍した後、チーフとしてマネジメントをする傍ら、アルマーニサービスマニュアルブックの制作に携わ

る。2010年に現在の法人に後継者として参画する。一般大学や他業界（美容・不動産・エンターテイメント業界他）などへの研修講師も務めるなど、内外への情報発信も積極的に行っている。日本社会事業大学専門職大学院 福祉マネジメント研究専攻に在学中。

■社会福祉法人愛川舜寿会 since1992

ファッション業界から一念発起し介護に転職した3つの理由

- ① 幼少期から自宅に要介護状態の祖母がいたこと。
- ② 7年間の在宅介護により両親が酪農家を辞め設立した法人であること。
- ③ サービス業として培ったホスピタリティは介護施設の経営にも落とし込めるはず！と安易に考えてしまったこと。

書籍「介護男子スタディーズ」

介護人材確保が叫ばれ、様々な企画が業界に存在していたが、「何か違うのではないか？」と感じていた。3Kという言葉への払拭を目的とするのは分かるが、介護をデフォルメするものでは意味がないと思った。本来的な魅力を写真と論考で伝え、それが“一発の打ち上げ花火”ではない「賞味期限の長い成果物」をつくる必要があると感じ、2014年に全国20の社会福祉法人共同プロジェクト「介護男子スタディーズプロジェクト」を設立した。業界では男女比2：8といういわば“マイノリティ”であ

る男性介護士（介護男子）の写真とタイトルをフックとし、建築家、社会学者、映画監督、現代美術作家、ファッションデザイナーなど、異業界から15名の論客が介護を多角的に捉える論考を掲載、読み物として成立する（スタディーズ）書籍を制作し介護への理解を促すというもの。2015年厚生労働省介護人材確保地域戦略会議に登壇し企画をプレゼン、いくつかの県ではすべての高校の図書室に設置。神奈川県は現在全ての私立大学の図書室やキャリアセンターなどに設置されている。ターゲットはあ

えて“若者に直接”ではなく、大学・高校の教員や親、“若者周縁の大人達”の理解を促すことが必要だと考えた結果写真よりも文章の方が多い。写真は、世界を舞台に活躍する写真家高木康行氏を起用し、人と人（ご利用者と男性介護士）の関係性を切り取る写真をすべて介護“現場”で撮影。書籍「介護男子スタディーズ」を発刊した。また、その後に著書

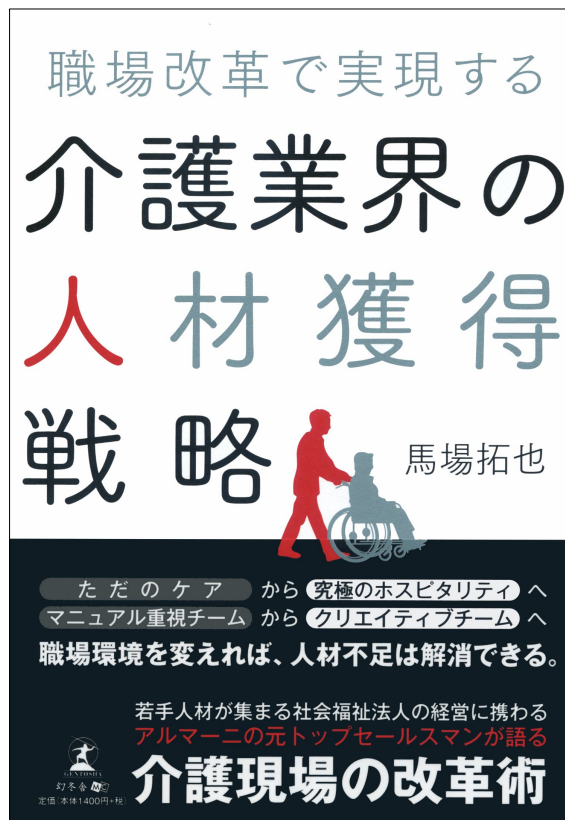
「～職場改革で実現する～ 介護業界の人材獲得戦略（幻冬舎）」を出版した。

『介護男子スタディーズ』

<http://www.kaigodanshi.jp>

『介護業界の人材獲得戦略』（幻冬舎）

<http://amzn.asia/f24Z7rq>



特養の壁崩壊

2016年 地域との隔たりである施設を囲っていた壁を取り払い、空間のあり方から地域との“距離”を考えるプロジェクト【距Re:Design Project】を若手女性建築家・造園家・大学生らと共に企画した。介護施設と地域との精神的距離を再考し、地域の誰もがアクセス可能な“座れる庭”「ミノワ・ザ（座）・ガーデン」と名付けた。工事着工直前に近接する相模原市で「津久井やまゆり園殺傷事件」が起き、一

斉に福祉施設のセキュリティ強化が叫ばれた最中ではあったが、地域と特養の壁崩壊という思想のもと決行した。介護施設が“街の風景”になっていくこと。職員がハンマーで壁を壊すことで私たちの思想を道ゆく人達に伝えること。職員の意識を施設から地域へ向け、行動変容へと繋げていくこと。これらが重要だと考える。また、プライバシーや個人情報保護が過剰になっている一方で地域包括ケアが

叫ばれている今だからこそ、壁で視線を遮るのではなく、庭空間で織りなされる「福祉の絵」を地域の目線に入れていく必要があるのではないかと考えている。そういった役目を担うことができるのは、ある種社会福祉法人の強みでもあり、要介護者が壁

の向こう側にいる存在ではないということを認識させることは大きな意義を持つと思っている。まず第一に変化があったのは、施設向かいにあるコスモ石油の店員さん達の私たちに対する笑顔とこちらに向けられる視線の変化だった。



ケア記録システム ケアコラボ

現在、ケア記録システム「ケアコラボ」をITベンチャーと共同開発し導入している。市場に存在する記録ソフトは、保険請求を伴うことから請求業務との連携がこれまでの「業界の常識」。すなわち「請

求業務がスムーズ」であることが最大のメリットである。しかし、「サービスごと」の請求業務中心のシステムでは、同一人物であるAさんがデイを利用した記録とショートを利用した記録が乱立するこ

とになる。それは一方で顧客情報共有のスピードと顧客情報の統合を求められるサービス業の視点に立った場合は、非常識且つ問題でもある。会社の顧客であるAさんがアルマーニ青山店とアルマーニ新宿店を利用したとして、それぞれの店舗からの情報共有がスムーズにできないことと同じ。この課題の解決にはレセプト業務とケア記録を切り離して考えることと、facebookのようにその利用者の生活を職員がタイムラインに投稿することで「人」（ご利用者）が中心のシステムにすることが重要。スマホなど即時性の高い端末を使用し、職員にとって“ちょっと楽しい記録”になること。また、特養などの職員規模になると全職員間の日常的なコミュニケーションが希薄化しがちだが、「いいね！」機能によりマネジメント層と現場職員間の“ゆるいコミュニケーション”の追い風ともなり、承認欲求や

親和欲求にも訴えかけるツールとなっている。面談や会議など、リアルなコミュニケーションは最も大切であるという前提に立った上で、私たちが日頃facebookなどのSNSで繋がっているゆるいコミュニケーションが介護の現場にも応用できると考えている。このシステム開発により、写真や動画でシーンや患部を共有できることはもちろん、勤続10数年のベテラン職員が新卒1年目の職員からスマホ操作の手ほどきを受けるという逆転現象が起きていることも副次的効果として面白い。若手人材においては圧倒的に入力スピードが早く、手書きのストレスも軽減されている。課題は世代間によるICTへのハレーションを受容し、いかに力強く共に推進できるかである。ちなみに、家族もアカウントを取得すればケアが見える。

ケアコラボ <http://page.carecollabo.jp>

